

「多様な症状」を生じた患者の診療 ～機能性身体症候群の観点から

－本日の事例概要－

資料 1 - 3

発達障害や光過敏性など生来の特性を背景に、睡眠不足や急性・慢性ストレスが加わることで発症した機能性身体症候群患者4名について、症状、経過、診療方針等について報告。

【4名の方の概要】

発症年齢 ・性別	主要症状	発症関連因子	診断
17歳男子	痛み、倦怠感、まとまらない思考、睡眠異常、感覚過敏	睡眠不足蓄積、注意欠陥多動性障害	慢性疲労症候群
11歳女子	痛み、過度の眠気、化学物質過敏、脱力	睡眠不足蓄積、月経、自閉スペクトラム症、注意欠陥多動性障害	線維筋痛症
14歳男子	過度の眠気、痛み、脱力	睡眠不足蓄積、自閉スペクトラム症、注意欠陥多動性障害	線維筋痛症
12歳女子	羞明、腹部症状、立ちくらみ、脱力を伴う倦怠感	学習時の見えづらさによる慢性ストレス、アーレン症候群(光過敏)	起立性調節障害

診療方針: 発達や感覚の生来特性認知と負荷因子軽減のための環境調整

- 知的に十分な力があるために学校等で見過ごされた特性を整理し本人、家族、支援者へ十分な説明を行う。
- 特性を知らないうちは「努力で解決できる」と本人、周囲共に考え、努力しハンディキャップを補う戦略をとっているため、覚知後は特性を踏まえ、ハンディキャップを小さくする環境調整を行う。
- その上で、対処療法があれば医療的対応を行う。

国立障害者リハビリテーションセンター病院第三診療部
小児科医長 田島 世貴先生提出資料